

アンティオキア教会には、すでにさまざまな地域からのディアスポラのユダヤ人が集まり、イエス・キリストの福音を聞き、礼拝していました。その中にはニゲルと呼ばれるシメオン、という人もいたと紹介されていますが、ニゲルというのは、黒いとか、黒人という意味の言葉で、アフリカ系の人も、アンティオキア教会には、出席していました。つまり当時の地中海世界のさまざまな地域からアンティオキアの町には人々は集まり、教会にも出入りしていました。そこでは当然、各地への伝道が話題にもなったでしょうし、祈ってもいたでしょう。そしてさらにアンティオキア教会は聖霊の導きの中で、伝道を推し進めるべく、二人の者を選び、派遣することになりました。バルナバとパウロです。

二人はまず最初にキプロス島に向かい、その地での伝道を展開していきます。助手としてヨハネ、つまりマルコを連れて行ったことが報告されています。キプロス島と呼ぶと何か小さな島のように見えますが、四国の半分程度の面積もある巨大な島です。二人はさっそくその地にあるユダヤ人の会堂で福音を語り始めます。ところが、そこに一人の魔術師がいて、二人が語る福音の妨害をしたというのです。さらに、魔術師が取り入っていた総督がイエス・キリストの福音を聞こうとすると、それをもまた妨害したというのです。

魔術師にとって、イエス・キリストの福音は邪魔であり、迷惑である、との直観があったのでしょう。

それはさらに言えば、この地域がなんらか、魔術の影響下にあった、というふうにも言えるかもしれません。そして今日の聖書箇所はその魔術師と、イエス・キリストの福音とがガチンコでぶつかり合った、ということが書き記されています。

魔術ということ、たぶん多くの現代人は自分とはあまり縁がない、と感じるかもしれません。魔術という言葉それ自体、よくわからない言葉になっているのではないのでしょうか。今、話を進めるうえで、魔術という言葉を共有するとすれば、この世界の背後に、目に見えないさまざまな諸力、神々の霊、悪霊や、悪魔の力、が働いているのだとして、その力を呼び寄せて、呪ったり、解いたりするものだと考えてみましょう。魔術師は、魔術の力を操り、この世界に働きかける、人間の力を超えた諸霊の力を引き出し、超自然的な力を発揮する者、ということになっていた。

魔術師という存在そのものが、怪しいものであったとしても、世界やそこに住む人間が、わけのわからない諸霊の力のもとにあり、その力に抑え込まれている以上、魔術師の力は必要だと多くの人は受けとめていたのだと思います。

今わたしたちが生きている世界は、そういう人間を超えた諸霊の力のもとに抑え込まれているのか、いないのか。科学の発達したこの時代に、そんなわけのわからない、力に抑え込まれているとは、考えないかもしれない。いやそうではない、と思って運氣、運勢を占いによって見てもらったりする人もいます。

今年ノーベル文学賞を受賞されたカズオ・イシグロという作家がおられます。

彼は日本で生まれ、両親ともに日本人なのですが、小さな時に父親の仕事でイギリスに行き、そのままイギリスでずっと暮らし、教育もすべてイギリスで受け、現在はイギリス国籍の小説家です。彼の作品に「浮世の画家」という作品があります。読まれた方もいらっしゃると思います。この小説の舞台は日本で、主人公は一人の画家です。戦争中軍部に協力して、戦意高揚のための絵をたくさん描くのです。彼はそれを国家のためと信じ、自分の信念を込めて、画家として活動するのです。彼の周りには、いつもたくさん若い弟子たちが群がり、ともに絵について語り、ともに国のために、自分自身のために絵を描いていきました。ところが戦争が終わると、すべては一変します。まったく空気が変わってしまう。人々は、戦争は軍部や、政治家によって推し進められたものであって、我々はそれに従う他なかったのだ、と言い出して、今度は平和主義や、民主主義こそ自分の信念だ、と言わんばかりに生きていく。

だがこの主人公はそうは思わない。思えない。確かに、軍部や政治家が進めたものだとしても、自分もその戦争の中で、自分の意志として、国策に沿った絵を描いた。それは自分の選択だった。あの時、自分は自分なりに考え、自分として判断して、あの道を選んだ。あの時自分はそのように考える以外にはなかった。自分が判断して、あの道を選択したことは動かしがたい。それは今もなお、あの戦争目的を信じ、あの戦争を美化するというようなこととは違う。戦後も軍国主義を貫く、というようなことでもない。しかし、あれは騙されて、いやいや協力したのだというようなことではない。まして、民主主義や、平和主義にさっさと鞍替えするように乗り移るのとも違う。

主人公は、戦争中の自分がこれだ、と自分で考え判断したことそれ自体を今になって否定するわけにはいかない、と言っている。その自分をどこかにおいてきぼりして、なかったかのようなふりをして、別なものに乗り換える、というわけにはいかない、と感じている。しかし、戦後の日本の社会の空気は、そ

ういう主人公の居場所を奪うほどに、ハイ、民主主義、ハイ平和主義という勢いの中にある。だから彼は、戦争を挟んで、軍国主義からも民主主義からも理解されない。主人公は言わば宙づりにされている。そういう主人公の物語をイシグロは書いていきます。

とても興味深い小説です。主人公はどうなっていくんだろう、と思う人は小説を読んでください。しかし一方でこの小説を読む人は、あらためて思うはずです。戦争中あれほど多くの人が支持した戦争。積極的に協力した戦争。そうして命を投げ出すほどに、その戦争に向かった人たち。その人々は戦後、なぜ、あんなにも早く、軍国主義から民主主義へ乗り移ったのか。乗り移れたのか、という素朴な疑問です。戦争中の自分はどこへ置いてきたのか、という疑問です。そんな疑問も持たないほどに、日本の社会は変化しました。この小説は、一人の画家の物語なのですが、同時に、多くの日本人の在り方に思いを巡らすことにもなっていく物語です。

この国に住んでいる人々の考えが敗戦を機にがらりと変わったのか。変わったのではなくて、もともと何かとりつかれているだけで、その取り憑かれる先が変わっただけではないのか。

つまりわたしが言いたいことはこういうことです。イシグロが静かに問いかけるように、戦争中実に多くの人たちが戦争を支持し、協力した。その人たちのほとんどが、戦後は手のひらを返したように、あれは強制されたことであり、自分の意志ではなかったとって、新しい主義主張に乗り換えていった。それは驚くべきことです。そしてそれこそ、魔術的な力だったのではないか、と思うのです。戦争に協力したのも、支持したのも、何か人間の力を超えた諸霊の力に抑え込まれるようにして、憑かれるようにして、戦争に向かったのではないのか。

戦争が終われば終わったで、こんどは、人間の力を超えた諸霊に抑え込まれるようにして、平和主義だとか民主主義に憑かれていく。思想の中身がどうだとか、こうだとかいうのではない。なにかの力に憑依されていく。それはどう呼ぶかは別としても魔術的な力なのではないか。

イシグロが描いたあの画家は、わけのわからない人間として評価される。だが彼は、その魔術の影響力の中で、その力に立ち向かっていた人なのではないか。魔術はわたしとは無関係だ、と思っている人は少なくない。だが、それは実は錯覚で、我々はいろいろなものに抑え込まれ、封じ込まれているのではないか。

バルナバとパウロが二人して、世界宣教、世界伝道の歩みを始めたその時、

待ち受けていたのは、魔術的なものだった、ということはとても示唆深いのです。魔術師は、この二人の働きを阻止しようとしたのです。福音の信仰から人間を遠ざけようとしたのです。魔術師は、自分の敵を知っていた、ということでしょう。

パウロは魔術師をにらみつけて、「ああ、あらゆる偽りと嘲りに満ちた者、悪魔の子、すべての正義の敵、お前は主のまっすぐな道を、どうしてもゆがめようとするのか。」と語った。魔術というのが、人間を、わけのわからない大きな力で抑え込もうとする力であるとするなら、イエス・キリストの福音は、その人が神の前で一個の人間として生きる道を示し、一個の人間であることを回復させる道なのです。

神と向き合い、神の言葉に聞いてその言葉と応答する中で、人は人となり、自分を回復する。なにかにとり憑かれているものではなく、自分でも気づかない大きな力に押さえつけられたものとしてではなく、神のまえでの一個の人間として生きる道、福音はそれを指し示す。「今こそ、主の御手はお前の上に下る。お前は目が見えなくなって、時が来るまで日の光を見ないだろう。」そういえばパウロも、ダマスコ途上で主の声を聞いた時、目が一時的に見えなくなったのでした。魔術師が見ていた世界があったと思います。魔術を使わなければ、いけない世界と人間が見えていたのだと思います。彼が見えている世界ではなく、福音が語る世界を見る。この世界は、人間は、神によって生かされ、神に背負われ、神に愛されている世界であり、神と向き合って、あなたになる世界だ、ということを経験した。目が一時的に見えなくなるのは、そのための時なのだ、ということでしょう。目が見えなくなった魔術師は、誰か手を引いてくれる人を探した、ということです。パウロの時にも手を引いてくれるアナニヤなる人物がいました。キリスト者には、その役割が使命として与えられているのでしよう。